

## 論文審査の結果の要旨および担当者

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 海川 能理子

論 文 題 目 参加と経営による持続可能なまちづくり：総合計画の  
マネジメントに活用するロジック・モデルの研究

(Participation and Management for Sustainable Municipalities:  
Application of Logic Models to Comprehensive Plan)

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 香坂 玲

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 高橋 誠

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 丸山 康司

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 特任講師 内山 愉太

副 査 愛知大学 地域政策学部 教 授 後 房雄

## 論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

本論文は、日本の特徴である自治体総合計画を基軸に、市民と協働で効率的に行行政経営を行うしくみについて考察したものである。自治体総合計画については多くの研究蓄積があるものの、開発援助の分野で活用され成果をあげてきたロジック・モデルの自治体総合計画への適用可能性に関する研究は限られる。本論文は、自治体経営の観点から、同モデルを総合計画に初めて適用した愛知県東海市を事例に、「計画から実施、その効果の評価までの一貫したマネジメントを支援すること」と、「参加型の合意形成に貢献するコミュニケーション・ツール」という同モデルの二つの特徴に着目し、特に「経営」と「参加」のバランスとその相克について議論を展開している。

本論文は2部7章から構成され、第1部を理論編(1~3章)、第2部を事例研究編としている。1章では、持続可能な発展、ローカルアジェンダ21といった環境政策の文脈と参加型民主主義の理論的架橋を試みている。2章では、「経営」の側面を軸とし、三重県の事務事業評価システムを事例に公共経営論を分析している。そのうえで、ロジック・モデルにより総合計画をマネジメントするという発想の根底には、市民のニーズへの応答と説明責任への対応という方向への改革として、各自治体で取り組まれてきた成果志向型の行政経営への転換があったとしている。3章では、ロジック・モデル概念の歴史的背景を説明している。ロジカル・フレームワーク、プログラム評価、業績測定各概念の整理を行ったうえで、政策評価に活用可能な枠組み及び指標としてセオリーオブチェンジ、Key Performance Indicator等についてもロジック・モデルとの関係性を考察している。事例研究編の序章となる4章においては、第5次東海市総合計画策定のプロセスについて、政策マーケティング、まちづくり指標等に注目しつつ、その背景と計画の策定過程を分析している。5章では、同市の総合計画の運用における、対話のツールとしてのロジック・モデルの活用について、まちづくり大会を含む同市の取り組みのプロセスとともに考察している。5章では、実践のプロセス内部に迫った詳細な分析であるという評価の一方、客観的記述に徹すべき箇所に評価が記述されるという指摘がなされた。6章では、同市の計画について、参加と経営の両観点から評価を行い、リサーチ・クエスションに対する応答として、協働型マネジメント・サイクルを構築し得たと結論付けている。7章では、本論文を結論付けるとともに、今後の学術研究における課題と、行政、市民側の課題を示唆している。

環境の側面のみならず、総合的な観点から持続可能なまちづくりを行う文脈においてロジック・モデルを導入し、モデルの活用において市民参加を実践した全国初の事例の詳細なプロセスの実践的分析が、理論的な意義とともに考察されており、学術的意義が認められる。よって、本論文の提出者、海川能理子氏は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと判断した。